



TITLE:

<研究報告>肺結核の進展様式(その
1)(〔第3部〕 化学療法部 (其3)肺結
核の発生と進展に関する研究)

AUTHOR(S):

森, 厚

CITATION:

森, 厚. <研究報告>肺結核の進展様式(その 1)(〔第 3 部〕 化学療法部 (其 3)肺結核の発生と進展に関する研究). 京都大学結核研究所年報 1950, 1: 52-53

ISSUE DATE:

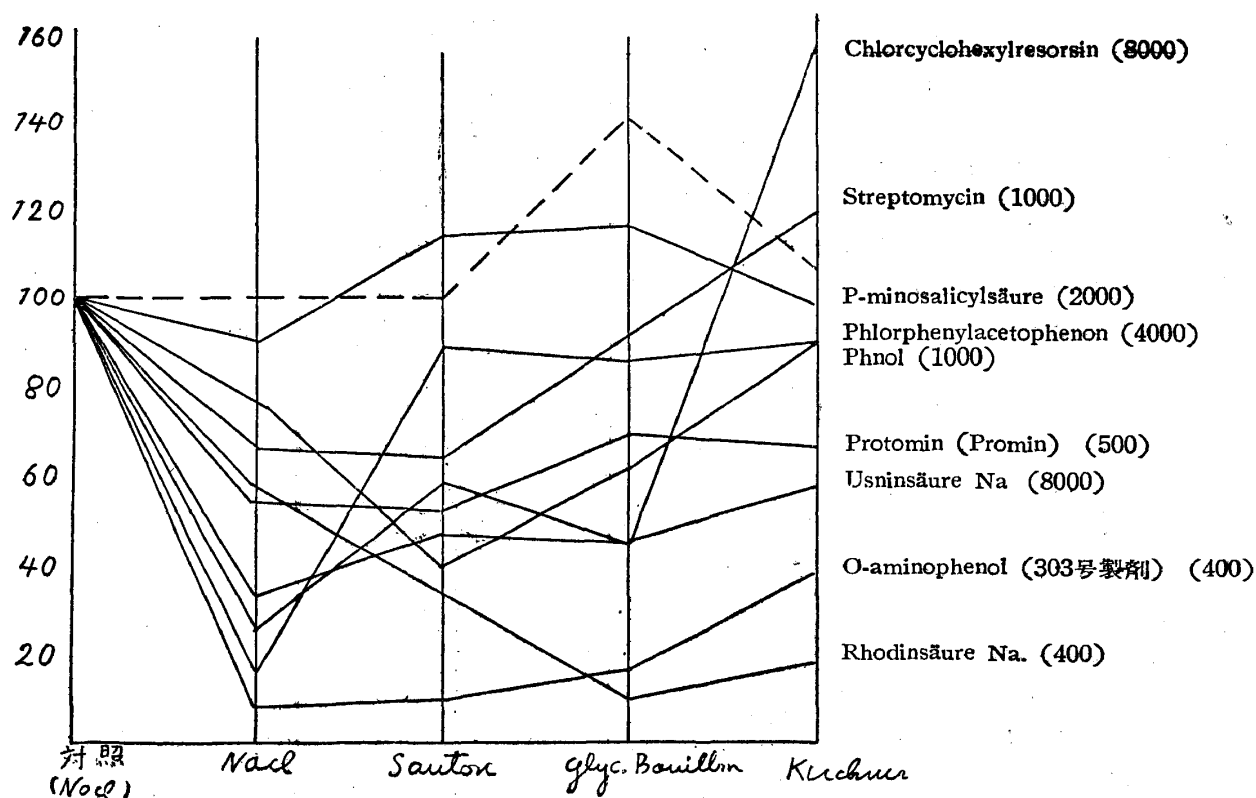
1950-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/50928>

RIGHT:

第3図



(其3) 肺結核の發生と進展に関する研究

肺結核の進展様式 (その一)

森

厚

第1編 「ツベルクリン」陽轉後の期間と各病型頻度。

肺結核の進展様式を明にする事がいかに重要且困難であるかは、古くから病理学者や臨床家の幾多研究があり、しかも未だ解決済みに至つてゐない事でも知り得よう。

我々は従來の欠点であつた経験による主観の混入を避け、且多数例による統計的檢索を基として、まづ田島は内藤の担当した第21回日本結核病学会総会特別講演「肺結核の病期と病型との關聯性に就て」の研究の一部を、「肺結核の初感染及再感染に関する研究」として発表したが、私は初及再感染時初発病型から爾後いかに進展してゆくかといふ主題を分担し、多数例に就てその後の成績をも補遺して検討した結果を報告したい。

本編では最初に「ツ」陽轉に伴ふ初発病型よりの進展方向を窮ひたい。

病型分類は本研究を通じて、胸部X線像のみによる内藤の変法を用ひた。

検査対象は市内某高女生と某結核病院看護婦。

1) 軟性双極性変化群の頻度は陽轉後2ケ年に於て減少の傾向を示さない。肺門淋巴腺腫脹の頻度は時日と共に明に低下する。肺内限局性陰影の頻度は時日と共に稍々減少するかの如き傾向を示すが、上野の者は寧ろ増加する。

2) 「ツ」陽轉者の爾後の肺結核進展方向は少くとも1~2年の間は主として非播種性轉移形成によると思はれる。

第2編 軟性双極性変化群、肺門淋巴腺腫脹並に滲出性肋膜炎をめぐる變遷。

成人肺結核の成立に就ては古くヴォルフ等に始まる独乙学派を経て北欧学派、熊谷等の成人初感染説の擡頭となつた。私は「ツ」陽轉に接續して現れる本3病型の変遷を本篇で明にしたい。之等の他に肺内限局性陰影も同じく存するが、「ツ」陽性者の外因性再感染時の初発にも現れるので之はわざと除いた。

検査対象は当所外來及入院患者、多くの他病院、療養所患者及集團檢診例。

1) 軟性双極性変化群、肺門淋巴腺腫脹及多くの滲出性肋膜炎は「ツ」陽轉に引續き現れ、其進展様式は大部分が非播種性拡大を示す。

2) 「ツ」陽轉後に現れる軟性双極性変化群からの進展傾向は濃厚感染曝露状態にある者の方が大きい。軟性双極性変化群及肺門淋巴腺腫脹をもつ者は滲出性肋膜炎を続発する頻度が高い。

3) 上記3病型を通じて約其半数近くが引續き進展を示す。且引續き現れる肺内限局性新陰影が殊に上野に多い事は爾後の肺結核進展上意味深いと考へられる。

4) 肺門淋巴腺結核よりレデケルの所謂 *Sekundärinfiltrierung* を経て肺内に結核病竈を作る場合が眞に存する。否かは不明だが、少くとも屢々認められる事ではない。